

巻頭随想 いま、伝えたいこと

沖縄戦の遺骨お迎えボランティア

京都産業大学名誉教授 所 功

沖縄で日米の激闘が行われてから満八十年。日本側の戦没者約二十万人（約半数は民間人）、米国側の戦死者約二万人もの命が失われたことは、まことに痛ましく悲しい。

戦後三十年の昭和五十年（一九七五）七月、この沖縄を初めて訪れられた皇太子殿下は、同妃殿下と共に、猛暑も厭わず本島南部戦跡の慰霊碑を巡拝され、遺族会館で遺族代表の声に耳を傾けられた後「談話」を発表された。

私たちは、沖縄の苦難の歴史を思い、沖縄戦における県民の傷跡を深く省み、平和への願いを未来につなぎ、ともどもに力を合わせて努力していききたいと思えます。払われた多くの尊い犠牲は、一時の行為や言葉によつてあがなえるものではなく、人びとが長い年月をかけて、これを記憶し、一人ひとり深い内省の中にあつて、この地^{この}に心を寄せ続けていくことをおいて考えられませんか。

ちなみに、これより八年前（昭和四十二年）八月、私は父の戦死した南洋ソロモンに少しでも近い沖縄の戦跡を巡拝

した。その際、遺骨が折り重なったままになっている洞窟を覗きながら、手を合わせて立ち去るほかなかった。

その悔しい思いもこめて同人誌に「沖縄戦蹟巡拝紀行」を載せたところ、親友の坂本大生氏が「いずれ有志で遺骨をお迎えに行こう」と共鳴してくれた。しかし、沖縄は当時まだ米軍の占領下にあり、五年後（同四十七年）に本土復帰してから、大和人^{やまとんちゅう}への蟠^{わだかま}りは容易に溶け^となかった。

それゆえ、前述のごとく同五十年、沖縄海洋博覧会の機会に両殿下が行啓され、真剣に慰霊の真心を示すのみならず、それをご自身で実践し続けて来られた。そのおかげで、徐々に和解が進んだ。けれども、いわゆる遺骨収集には、現地関係者の理解と協力をえなければならぬ。

そこで、「修養団」（SYD）という社会教育団体に勤めた坂本氏は、沖縄出張のたびに県教育委員会（社会教育課）や県遺族会の方々と話し合いを重ね、昭和六十年（一九八五）から「沖縄遺骨収集シルバーボランティア」による奉仕を始めた。それを今年（二〇二五）まで四十年間も続けて来られた主催者・参加者たちには敬服のほかない。

ただ、それが諸事情により今回限りで終了されることになった。けれども、「この地に心を寄せ続ける」ことは、今後とも決して忘れず、各自で可能なことをやっていきたい。